

神奈川災ボラ、西日本豪雨災害被災地支援ボランティアバス第1陣（岡山県総社市）の報告

2018年7月27日（文責）第1便参加者：福田博（海老名災ボラ代表、神奈川災ボラ理事）

（1）西日本豪雨災害の発生（2018年7月6日～7日）と支援の動き（初動）

① 西日本豪雨災害の発生（2018年7月6日～7日）以降、行政等の救助・支援の動きが開始

2018年7月、西日本豪雨災害による被害の拡大がマスコミによって、連日報道された。

・土砂崩れや河川の氾濫による死亡者は、日を追って増大し、7月9日の時点で、死亡者数は102人、行方不明90人と報じられた（毎日新聞ニュース）

【政府・県・政令指定都市などの動き】

・総務省は、災害時に応援職員を確保するため、自治体同士を組み合わせる「対口支援」（たいこう支援、カウンターパート）を発動し、次の組み合わせが決まった（7月11日の新聞報道による）。

被災自治体	支援自治体	被災自治体	支援自治体
岡山県倉敷市	東京都、埼玉県、福岡県	広島県尾道市	長野県
広島県呉市	静岡県、静岡市	愛媛県西伊予市	熊本県
広島県坂町	川崎市		

【被災自治体に対する関係する自治体からの支援の動き】

・被災した自治体では、通常業務に加えて、災害に係る業務の急増に対処するため、災害時の相互支援協定のある自治体や関係の深い自治体などから、職員が応援派遣された。東日本大震災や熊本地震で被災した自治体からも、西日本豪雨災害で被災した自治体へ応援職員が派遣されたようである（テレビ報道）。

【全国社会福祉協議会の動き】

・7月9日に「平成30年7月豪雨災害福祉対策本部」を設置、被災地に職員を派遣、被災地のボランティアセンターの設置に係る調整を開始した。全社協のホームページでは、災害ボランティアセンターの運営スタッフを各地のセンターへ派遣する形で、社協の近畿ブロックは岡山県内のセンターを支援、九州ブロックは広島県内のセンターを支援、社協の四国ブロックは愛媛県内のセンターを支援する方針を打ち出した（7月11日頃）。

（2）神奈川災ボラの支援活動の動き

① ボラバス派遣の決定（7月15日）から～ボラバス参加者募集締め切り（7月19日）まで

被害が増加する中で、7月10日に神奈川災ボラ3役は、県社協、県共同募金会との接触し、情報収集を始めるとともに、3役は緊急理事会を開催することを決定し、理事に連絡した（7月11日）。

7月15日（日）神奈川災ボラの緊急理事会が開催され、神奈川災ボラとしての「被災地支援活動要綱」を決定した。合わせて、西日本豪雨災害へのボラバス第1便（7月20日～22日）を決定した。当面、神奈川災ボラの資金を使って参加者の個人負担を7000円に低減すること、先遣隊を派遣して、ボラバスの派遣先を選択することなどを決定した。

緊急理事会の終了後に、「被災地支援委員会」を開催し、第1便の募集要項（参加定員40名、緊急のため研修会は省略など）を決定した。翌日、先遣隊（河西理事長、他1名）は被災地を視察し、ボラバス第1便の派遣先を「岡山県総社市」に決定した。

② 参加者募集の事務における課題（事務作業の遅れ⇒緊急時における事務局員の不足）

- ・参加希望者本人による申込を原則とし、代理人による申込は不可とした。
- ・高校生以下の参加希望者は、保護者の承諾を必要とした。
- ・参加申込の方法では、神奈川災ボラのメール、フェイスブック、FAXの3種類とした。
- ・参加申込の受付は、先着順で40名とした（ただし、第1便では経験者を優先する）。
- ・ボラバス参加費（7000円）の納入は、事前の郵便振替と出発日の現金受渡の両方とも可とした。

●参加申込者への神奈川災ボラからの返信が遅れ、参加申込者からの問い合わせに十分には対応できず、事務作業が遅れた。その原因としては、ボラバス派遣第1便の決定から出発までの期間が5日間と短かったこと、事務の急速な増加に対応する事務局員の確保が困難であったことによるものとみられる。しかし、短い期間で40名の参加者を確保し、ボラバス派遣を実現できたことは神奈川災ボラの力量だと思う。

（2）バス運行に関して：ボラバス第1便の出発（7月20日夜）、帰着（7月22日、早朝）

① バス内での「研修」：ボラバス派遣の決定からバス出発までの期間が短かったために、事前研修を省略しバス内での研修に切り替えた。ボランティア経験者が多かったため、問題はなかった。

② ボラバスでの「資機材の運搬」：バスの荷台に神奈川災ボラの所有するスコップやネコ、土嚢袋などと参加者の荷物を積載した。被災地のボラセンに負担をかけない措置として重要である。

③ バス内での「休息・睡眠の確保」：2時間のトイレ休憩、夜10時以降の消灯・私語の禁止などにより、翌日の活動に備えてバス内で「休息・睡眠を確保する」ことは重要である。

ボラバス運行について、神奈川災ボラ加盟ボラバスチーム（経験と人材）が効果を発揮した。

（3）被災地（岡山県総社市）での活動について

総社市は、岡山県の県都岡山市の西側に位置し、市の中央付近を高梁川が流れ、南で倉敷市と接する。総社市下原地区は、今回の豪雨災害で川の堤防が決壊し、4千棟以上が浸水し多数の死者が出た倉敷市真備町と接している。（真備町を流れる小田川が高梁川の合流する地点で「バックウォーター現象」を起こして小田川の堤防が決壊して大きな被害が出た。第2便は倉敷市に行く予定になっていたが、台風接近で中止）

① 災害ボランティアセンター（市中央部）と下原地区に「サテライト」が設置されていた

- ・総社市下原地区は、アルミの産廃工場の爆発事故の後に、高梁川の氾濫で洪水となった地域である。
- ・総社市災害ボランティアセンターは市役所や市社協などの公共施設が集中する市中心部に設置されている。また、下原地区に災害ボランティアセンターのサテライト（現地拠点）が公民館に設置されている。

② 災害ボランティアセンター（市中心部）から、下原地区のサテライトへバスで移動して活動開始

神奈川災ボラ第1便のボランティア40名は、総社市災害ボランティアセンターに21日（土）7時頃に到着した。センターでボランティア受付（正式には9時）が開始されるまで、センターで待機した。

- ・ボランティア受付（ボラバス責任者が対応）後、1名はセンターに残り、市役所のガレージで救援物資の仕分け作業を行った。大部分のボランティアは、センターのバス2台に分乗し、下原地区のサテライトへ移動した。そこで、サテライトの運営スタッフから活動の指示を受けた（ボランティア活動報告書に記載）。
- ・最初の活動は、高梁川の堤防外側の浸水した水田の後片付けであった。ボランティアが横一線に並び、水田に残された材木・タイヤ・ゴミを取り除く作業（水田の後片づけ）であった。既に、地元の農家やボランティアが後片付けをやったせいか、かなり片付いていた。水田の水は引いていたが、長靴が最適であった。

ゴミを道端に出すと、すぐに軽トラックが来て、災害ゴミの集積場に持って行った。稲は、「減収はするけれども、一定の収穫は見込める」と地元の人が話していた。(私は稲の強さに感動した。)

・水田での後片付けは終了後、再びサテライトに戻り、そこで、トイレと休憩をして、次の活動指示を待った。次は、被災した住宅の後片付けであった。神奈川のボランティアは、サテライト運営スタッフの指示に従い、3つのグループに分かれて、被災者の住宅の後片付けに向かった。グループリーダーが「グループの登録」をして「ボランティア活動報告書」を受け取り、「地図」をもらって被災者宅へ向かった。

③ 被災地域のサテライトでのボランティア活動の状況

・私が行った住宅には、避難所に寝泊まりしている被災者が既にきて片付けをやっていた。その家の人の指示に従い、水につかった家具の運び出しや、室内外の清掃を行った。その方の話では、アルミ工場の爆発事故で周囲の住宅の窓ガラスが吹き飛び、そこに洪水が押し寄せてきたこと、1階の床上浸水の後を示しながら、その時の状況を話してくれた。また、その家の人がサテライトからペットボトルの水をたくさん持ってきてくれた。暑い日で蒸し暑かったが、屋内の作業のため、直射日光を受けずに作業出来た。

・作業と休憩は、グループリーダーの声掛けで実施した。20分作業と10分休憩といった活動時間と休憩時間の配分であった。リーダーの時間配分とは別に、自分の体調に合わせて、自分で休息をとることが出来た事も、熱中症対策として有効であったと思う。

・第1便のバスには、経験豊かなボランティアが数多くいた。そうした方がグループリーダーとなり、被災者ニーズとボランティアの安全衛生に配慮してくれていたため、熱中症のボランティアを出すことなく活動出来たと思う。(私が2011年4月9日、東北大震災・神奈川災ボラ第1便に乗車した時は64歳)被災現場がサテライトの近くであり、そのトイレを使うことができたので、苦勞することはなかった。

・昼休みはサテライトの一室に行ったが、他のボランティアで一杯であったので、外の民家の軒先の日陰で早朝に買った弁当を食べた。暑さで腐らないように、私は梅干しや昆布のおにぎりを食べた。サテライトにはペットボトルに入った飲物がたくさん用意されており、自由にもらうことが出来た。

・昼食後、再び、被災者宅の後片付けや泥だし・清掃を行った。災害ボランティアセンターの指示により午後2時で作業を終えた。社協のバスで、センターに戻った。手足の消毒を行い、アイスクリームやペットボトルの飲料をもらい、神奈川のバスに戻った。

神奈川のバスは帰路に国民宿舎に立ち寄り、風呂に入った。作業着を着替え、入浴休憩でリラックスした。

④ 帰りのバス内で参加者の感想(振り返り)

前夜のバスの中では、参加者の自己紹介が中心であった。帰りのバスの中では、本日の活動に関する感想を参加者全員が述べた。被災者の状況に思いを寄せる発言、ボランティアとしてそれなりの活動が出来たことに満足する意見などが多かった。(私は72歳の今でも、何とか活動出来たことに安堵した。)

(3) 岡山県総社市の災害ボランティアセンターから学ぶこと

① 熱中症対策が充実していたこと：夏のボランティア活動で重要なことは熱中症対策である。

・涼しい休憩場所が準備されていた。公民館の中の1室は冷房が効いた部屋があった(部屋が狭いため、ボランティア全員は入れなかった)。公民館の入口に大型扇風機が回っていた(霧を撒布)。

・公民館の外のテント内にペットボトルの飲料が大量に置かれており、欲しい人には与えられた。ペットボトルの飲料は、企業からの寄付が大部分であると聞いた。

・活動時間帯を通常ならば15時までのところ、暑い日なので14時まで活動時間を短縮した。

- ・活動時間と休憩時間は、グループリーダーに任されていたので、グループリーダーの経験が活かされた。
- ・どこでも重要な事だが、公民館の中のトイレと、外に工事用トイレ（2台）が設置されていた。

② 災害ボランティアセンター（中央）とサテライト（被災現場）の連携が円滑である

・総社市の中心部（市役所及び公共施設がある中心部）は大きな被害を受けていないように見えた。総社市の中枢機能が維持されていることが重要である（司令塔）。

・被災現場が特定の地域（下原地域など南部）に集中しているため、そこにサテライトを置き、被災現場に近いところで、復旧に向けたボランティア活動が行われている。センターとサテライトの連携が社協の「バス」でボランティアを移動させるなど、うまく行っているように思えた。

③ 災害ボランティアセンターからの情報発信などが適切で、初期に「人」と「物」が集まった

・総社市ボランティアセンターのホームページには、送って欲しい物資のリスト、ボランティア活動に関する連絡事項（休止日も含む）、問い合わせ先などが明確に示されており、わかり易かった。

・ホームページで「ボランティア登録・活動状況」を見ると、7月8日（日）～15日（日）の1週間がそれ以降に比べて最大の登録者数を記録しており、初期にボランティアが多く集まっていたことが分かる。特に7月8日（日）には500人を超える高校生がボランティア登録をしており、14日（日）には一般（大人）が1099人、合計で1540人と最大の登録者数を記録していた。

・総社市災害ボランティアセンターは、私たちがボランティア活動をした（7月21日）翌日（7月22日）以降、県外のボランティアの受け入れは中止し、県内及び市内のボランティアで今後の活動を継続することをホームページに掲載した。

・初期段階で「人」と「物資」を集めることに成功した結果だと思われる。「水害の復旧は短期決戦」と言うことを聞いたことがある。災害ボランティアセンター設置運営の「スタート・ダッシュ」に成功した数少ない実例になっているのではないかと私は思う。

④ 各地の災害での支援活動に参加する中から、総社市は大きな「受援力」を形成してきた！

・災害対策に積極的な総社市の職員がいて、東日本大震災以降、積極的に被災地に職員やボランティアを動員したという（テレビ情報）。東日本大震災の被災地で、総社市のビブスを付けた人々を東北各地で見たという人が神奈川災ボラの中にいた。

・こうしたことから推論すると、総社市の職員・社協職員・ボランティアが東日本大震災の被災地に行き、支援活動する中で、災害対策や災害ボランティアセンターの運営などのノウハウを身につけたと同時に、各地の人々との人的なつながりを形成してきたのだと思う。そのことが、総社市の高い受援力（支援を受ける力）を形成で来たのではないか。災害の時に、支援される側も支援する側も、「お互いさま」という気持ちで接することが重要ではないかと私は思う。

⑤ 今後の課題：災害ごみの搬出とゴミの集積場（復旧・復興に関して）

総社市の被災現場で、私たちが道端にゴミとなった物を出すと、すぐに軽トラックが来て災害ゴミの集積場へ持って行ってくれた。住民の被災者に聞くと、災害ゴミの分別はしていないので、今後が大変になるだろうと言っていた。

災害ゴミの処理では、市や県を超えた広域的な対応が必要になっている。これは、ボランティアでは何ともできない、行政機関（市町村・県・政府）が責任をもって推進すべきことである。